

01

中央銀行制度の経済学 新制度経済学からのアプローチ

折谷吉治 著

学術出版会
7200円+税/567ページ

profile

おりたに・よしはる

富山銀行非常勤監査役。1948年富山県生まれ。金沢大学法文学部卒業、日本銀行入行。金融研究所研究第2課長、考査局考査役、国際局アジア担当参事、信用機構室決済システム担当審議役などを歴任。2002年から14年3月まで明治大学商学部教授。



新制度経済学を 中央銀行制度全般へ適用

評者
BNPパリバ証券経済調査本部長
河野龍太郎

金融政策を中央銀行に任せたままでよいのか、中央銀行業務は民間に委託できないのか、そもそも中央銀行は必要なのか、等々。本書は、近年発展の著しい新制度経済学を適用し、中央銀行の主要機能を分析したものだ。大著で、じっくり時間をかけて読む必要があるが、中央銀行制度を考えるうえで必読だろう。新制度経済学の中央銀行制度全般への適用は世界初で、学問的貢献も大きい。

中央銀行が供給するのは、金融政策などの公共財的サービスだけでなく、決済サービスなどクラブ財的性格を有するものもある。このため、組織ガバナンスは、パブリックガバナンスだけでなく、効率性を追求する民間組織としてのコーポレートガバナンスも必要だ。それ故、多くの国では、金融政策委員会、経営委員会、監督委員会など複数ボード制を採用するが、単一のボードですべてを決定するのは日本だけだ。新日銀法の施行以降、必ずしもうまくいっていないとすれば、制度設計そのものに原因があるのかもしれない。

中央銀行制度の経済学

目次

第I部 中央銀行制度の基本構造

- 第1章 金融システムにおける中央銀行の存在理由
- 第2章 中央銀行のガバナンス・ストラクチャー
- 第3章 中央銀行のパブリック・ガバナンス

第II部 中央銀行の主要機能

- 第4章 現金通貨供給機能の多角化
- 第5章 金融政策のガバナンス理論
- 第6章 ブルデンス政策のオーナーシップ理論
- 第7章 金融危機管理における中央銀行の役割

第III部 中央銀行と決済システム

- 第8章 決済システムのガバナンス理論
- 第9章 中央銀行の決済システムガバナンス
- 第10章 中央銀行決済システムの多角化
- 第11章 中央銀行決済システムのグローバル化

い。今まで、この点を取り上げられてこなかったのは不思議だ。健全性監督については、立ち入り検査等を含めて、中央銀行が主管すべきだという。ただ、単独だと権限集中問題や官僚制の弊害が大きくなるため、預金者保護などは別の主体が担う複数監督制にすべきという。米欧では金融危機の後、健全性監督は中央銀行に集約されている。日本ですうならないのは、現行制度がうまくいっているためか、日銀の単一ボード制の限界が表れているためか、気になる。

本書で最も興味深いのは、金融危機時の公的資金の供給を中央銀行に委ねよという主張だ。日本と同様、米国でも金融危機時に問題になったのは、公的資金注入が必要になっても、危機が深刻化するまで政治的合意に達しなかった点だ。議会制民主

主義の限界ともいえるが、制度の欠陥を補正すべく、中央銀行があらかじめ通貨発行益を積み立て、それを原資に政府、議会から独立して公的資金注入を決めよと提言する。高度に専門的な問題を機動的に政治が決定するのは難しく、政治がかかわること、混乱に拍車をかけ、多大なコストを要してきたのも事実だ。評者も同意するが、果たして中央銀行に任せるといふ決断が政治にできるのだろうか。

もう一つ論争になるのが、為替政策も中央銀行が主管すべきという点だ。日本は、中央銀行が為替政策の権限を一切持たない珍しい国だ。もし、日銀が為替政策を担っていたら、内部調整で適度に為替安定に配慮しつつ、物価安定を追求し、80年代後半以降の金融政策を巡る混乱も回避できたかもしれない。